

6/14 Fri.

第639回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.639 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE
ダン・タイ・ソン -p.7
DANG THAI SON
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ウェーベルン
WEBERN

夏風の中で [約12分] -p.10
Im Sommerwind

モーツァルト
MOZART

ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K. 414 [約25分] -p.11
Piano Concerto No. 12 in A major, K. 414
I. Allegro
II. Andante
III. Allegretto

[休憩]
[Intermission]

シェーンベルク
SCHÖNBERG

交響詩〈ペレアスとメリザンド〉 作品5 [約41分] -p.12
Pelleas und Melisande, op. 5

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

6/20 Thu.

第38回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.38 / Festival Hall 19:00

6/22 Sat.

第267回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.267 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

6/23 Sun.

第267回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.267 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

ピアノ
Pianos

角野隼斗、フランチェスコ・トリスターノ -p.7,8
HAYATO SUMINO, FRANCESCO TRISTANO

コンサートマスター
Concertmaster

長原幸太
KOTA NAGAHARA

ワグナー
WAGNER

**楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉から
前奏曲と愛の死** [約17分] -p.14
"Tristan und Isolde" Prelude and Liebestod

ブライス・デスナー
DESSNER

2台のピアノのための協奏曲 (日本初演) [約23分] -p.15
Concerto for Two Pianos (Japan Premiere)
I. - II. - III.

[休憩]
[Intermission]

ウェーバー
WEBER

歌劇〈オイリアンテ〉序曲 [約8分] -p.16
"Euryanthe" Overture

ヒンデミット
HINDEMITH

ウェーバーの主題による交響的変容 [約21分] -p.17
Symphonic Metamorphosis of Themes by Carl Maria von Weber
I. Allegro
II. Turandot: Scherzo
III. Andantino
IV. March

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：非破壊検査株式会社 (6/20)
協賛：東海旅客鉄道株式会社 (6/20)
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 (6/22、6/23)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会 (6/22、6/23)
協力：コジマ・コンサートマネジメント (6/20)
※6/20公演では読売テレビの収録が行われます。

6/28 Fri.

第673回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 673 / Suntory Hall 19:00

6/30 Sun.

第135回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 135 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
ギター
Guitar
コンサートマスター
Concertmaster

ハイドン
HAYDN

ヴィヴァルディ
VIVALDI

武満 徹
TAKEMITSU

[休憩]
[Intermission]

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

マキシム・パスカル -p.6

MAXIME PASCAL

村治佳織* -p.8

KAORI MURAJI

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 第22番 変ホ長調〈哲学者〉[約16分] -p.18

Symphony No. 22 in E flat major "The Philosopher"

I. Adagio

II. Presto

III. Menuet

IV. Presto

〈四季〉から“春”(ギター独奏版)* [約11分] -p.19

'Spring' from "The Four Seasons" (Solo Guitar version)

I. Allegro

II. Largo e pianissimo sempre

III. Allegro

〈虹へ向かって、パルマ〉* [約15分] -p.19

Vers, l'arc-en-ciel, Palma

オーボエ・ダモーレ：北村貴子

Oboe d'amore : TAKAKO KITAMURA

バレエ音楽〈春の祭典〉[約33分] -p.20

Le sacre du printemps

【第1部】大地礼賛

I. 序奏 — II. 春のきざしと乙女たちの踊り — III. 誘拐 —

IV. 春のロンド — V. 敵の都の人々の戯れ — VI. 賢人の行列 —

VII. 大地への口づけ — VIII. 大地の踊り

【第2部】いけにえ

I. 序奏 — II. 乙女たちの神秘的な集い — III. いけにえの賛美 —

IV. 先祖の呼び出し — V. 先祖の儀式 — VI. いけにえの踊り

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

オペラを得意とする
名匠のタクトが紡ぐ
劇的なドラマ



©読響

オペラの指揮に長けた名匠ヴァイグレが、〈ペレアスとメリザンド〉や得意のドイツ音楽などを披露。巨大編成のオーケストラを自在にドライブし、劇的かつ官能的な音楽を生む。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めた。在任期間中に、同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ポリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエングリン〉〈タンホイザー〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。今年3月にはベルリン・ドイツ・オペラで〈スペードの女王〉を振り、好評を博した。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。

6/14
定期

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール（6/30）

6/28
名曲

6/30
横浜マチネー

Maestro

指揮

マキシム・パスカル

MAXIME PASCAL, Conductor



©読響

鮮やかで圧倒的
鬼才パスカルが振る
〈春の祭典〉

長い手足をバネのように使い躍るような指揮で熱い音楽を作る鬼才パスカルが、〈春の祭典〉などを振り、迫力の大管弦楽から華麗なサウンドを引き出す。

1985年仏カルカソンヌ生まれ。幼少よりピアノとヴァイオリンを学び、パリ国立高等音楽院で指揮をフランソワ＝グザヴィエ・ロトに師事。2014年フランス人として初めてネスレ・ザルツブルク音楽祭のヤング・コンダクターズ・アワードを受賞したのをきっかけに、欧州で活躍。先進的な現代音楽演奏グループ「ル・バルコン」の創設者として、幅広いレパートリーで音楽と最先端の音響・照明システムを融合させた活動を展開している。〈ナクソス島のアリアドネ〉や〈月に憑かれたピエロ〉で好評を博したほか、2018年秋からシュトゥットハウゼンの長大な連作オペラ〈光〉ツィクルスをスタートさせ、フィルハーモニー・ド・パリなどで上演して話題を呼んでいる。

これまでにミュンヘン・フィル、デンマーク国立響、RAI国立響、レ・シエクルなどの楽団で客演するほか、ミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、ベルリン国立歌劇場などでも活躍。23年夏は、エクサン・プロヴァンス音楽祭に初登場し〈三文オペラ〉を、ザルツブルク音楽祭ではウィーン・フィルとマルティヌー〈ギリシャ受難劇〉を、エネスク国際音楽祭では〈アッシジの聖フランチェスコ〉を披露し、大きな成功を収めた。24年8月からはスウェーデンのヘルシンボリ響の首席指揮者に就任する。日本においては、東京二期会に度々登場して、〈金閣寺〉〈サムソンとデリラ〉〈ルル〉を指揮し、いずれも好評を博した。読響とは、20年、22年に続き3回目の共演。



©佐藤寛敬

ピアノ

ダン・タイ・ソン

DANG THAI SON, Piano

ジャンルの垣根を超える新時代のピアニスト。1995年生まれ。東京大学大学院在学中、ピティナ特級グランプリ受賞をきっかけに本格的に音楽活動を開始。2021年ショパン国際コンクールセミファイナリスト。東京大学大学院を修了後、国内外のコンサート活動を行うかたわら、^{かていん}“Cateen”名義で自ら作編曲および演奏した動画をYouTubeで配信し、人気を博す。これまでにポーランド国立響、ハンブルク響、ボストン・ポップス・オーケストラなどと共演。「情熱大陸」「題名のない音楽会」などテレビにも出演多数。スタインウェイアーティスト。24年には、Sony Classicalと専属契約を結ぶ。現在は拠点をニューヨークに移し、英国ロイヤル・アルバート・ホールにデビューするなど、活躍の場を広げている。読響とは21年の初共演以降、共演多数。



©Ryuya Amao

ピアノ

角野隼斗

HAYATO SUMINO, Piano

6/14
定期

Artist

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Artist

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Artist



©Ryuya Amao

ピアノ

フランチェスコ・
トリスターノ

FRANCESCO TRISTANO, Piano

バロック音楽、現代音楽、テクノ音楽、自作のレパートリーで世界中を駆け巡り、J.S. バッハの鍵盤作品全録音を続けながら、電子音楽レーベルでダンス・アルバムの録音活動をしている。1981年ルクセンブルク生まれ。2000年に19歳でプレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管でアメリカデビューをして以降、ヨーロッパ、アジアなどで多くの演奏会に出演している。04年のオルレアン(フランス)20世紀音楽国際ピアノコンクール優勝。11年ドイツ・グラモフォンからアルバム「bachCage (バッハケージ)」をリリース。17年ソニー・クラシカルと録音契約を結び、「東京ストーリーズ」「オン・アーリー・ミュージック」を、最新のアルバムは、23年に自身のレーベル“intothe future”から、J.S. バッハ「イギリス組曲全曲」をリリース。

6/28
名曲

6/30
横浜マチネー

Artist

卓越した技巧と音楽性を持ち、ジャンルを超えて活躍する日本を代表するギタリスト。15歳でCDデビューを飾り、フランスへ留学しアルベルト・ボンセに師事。1999年には、ホアキン・ロドリーゴの前で彼の作品を演奏した。パリ・エコールノルマル音楽院を卒業後に帰国し、ソロ活動を展開。国内及び欧州の楽団と共演を重ね、2003年英国の名門レーベルDECCAと日本人としては初の長期専属契約を結び、数多くのCDやDVDをリリース。NHK-Eテレ「テレビでフランス語」、テレビ朝日「徹子の部屋」をはじめテレビやCMなどに出演し、J-WAVE (FM) の番組ナビゲーターを務めるなど様々なメディアでも活躍している。出光音楽賞、村松賞、ホテルオークラ音楽賞、ベストドレッサー賞(学術・文化部門)など受賞多数。読響とは1994年以降、多数共演。



©Kazumi Kiuchi

ギター

村治佳織

KAORI MURAJI, Guitar

ウェーベルン
夏風の中で

ウィーン生まれのアントン・ウェーベルン（1883～1945）は1902年、子供時代を過ごしたクラーゲンフルトから故郷に帰還する。ウィーン大学に入学するため。そこで、近代音楽学の生みの親のひとり、グイド・アードラーに師事するかわら、和声や対位法、さらにはチェロやピアノも習い、音楽理論と演奏実践の両分野を精力的に行き来していた。

作曲には散発的に取り組んだが、意欲と能力が煮詰まり、いよいよスパークする時がやってくる。1904年のことだ。その“電流”はウェーベルンにふたつの行動をとらせた。ひとつは大管弦楽のための牧歌〈夏風の中で〉を作曲すること、もうひとつはアルノルト・シェーンベルクに弟子入りすることだ。前年にベルリンからウィーンに戻ったシェーンベルクは当時、在野の作曲家・音楽教師として活動していた。その作曲教室の門を、ウェーベルンと、2歳年下のアルバン・ベルクが同時に叩いた。1904年の秋、ウェーベルンはこうして、作曲の師と盟友をいっぺんに得る。

〈夏風の中で〉はウェーベルンが、シェーンベルクに教えを乞う直前、手習いの総決算として書き上げた作品だ。若き作曲家はブルーノ・ヴィレの同名の詩（『柏林の黙示録—全預言者の物語』1901年、第6部所収）からインスピレーションを受けて、この管弦楽曲に取り組んだ。

「大管弦楽のための牧歌」なる副題は、ワーグナーの〈ジークフリート牧歌〉を思い起こさせるが、音楽はむしろ、フランツ・リストやリヒャルト・シュトラウスといった作曲家の筆^{ほうふつ}を彷彿とさせる。とはいえ、音による自然描写などが頻出するわけではなく、ヴィレの詩の構造、たとえば前半の「色彩感あふれる陽気な世界」（視覚）と、後半の「咆哮^{ほうこう}する風に合流する被造物の声」（聴覚）との対比を、音楽に翻訳して示す。その意味で、音楽は対等な立場で標題と共鳴する、としたリストの交響詩の理想に近い。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1904年／初演：1962年5月25日、シアトル／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット4、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン6、トランペット2、ティンパニ、打楽器（シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル）、ハープ2、弦五部

モーツァルト
ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K.414

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は1781年、ウィーンに移住し、この地で独立した音楽家としての生活をスタートさせた。モーツァルトは1782年か83年に、念願のフォルテピアノを手に入れる。それまで演奏会ではシュタイン製のフォルテピアノを借りていた。それに飽き足らなくなり、アントン・ヴァルターの中古楽器を購入したのだ。

シュタインのほうは、裸の木のハンマーヘッド（打弦部）を跳ね上げるアクションのピアノ。音は直接的で固く^{びんしょうせい}敏捷性は高いが、強く鍵盤を叩くと2度打ちが避けられない。軽やかな音色が特徴で、奏者のタッチに繊細な反応を示す。一方、1782年当時のヴァルターの楽器は突き上げ式のアクションで、革で覆われたハンマーヘッドは、シュタインのものに比べ大きい。敏捷性が損なわれるかわりに渋い音色が強調される。強く打鍵しても2度打ちしない機構なので、シュタインに比べ強弱の幅が広く、劇的な表現に向く。

この“楽器移行期”に、モーツァルトはピアノ協奏曲第12番K.414を作曲、数か月遅れて第11番K.413と第13番K.415も書き上げた。問題はどのタイミングでピアノが切り替わったかである。おそらくK.414とK.413の間で移行した。というのも、軽やかな楽想のK.414と、強弱の差を強調するK.413との対比が、シュタインとヴァルターの楽器の対比と軌を一にするからだ。

第1楽章 協奏的ソナタ形式。楽章全体を通して、一足飛びに跳躍する音型と、1音ずつ滑らかに動く音型とを対比的に扱う。

第2楽章 協奏的ソナタ形式。ヨハン・クリスティアン・バッハのオペラ〈心の磁石〉の序曲を引用している。1782年1月に亡くなった師への追悼の意があるかもしれない。

第3楽章 ロンド形式。主題は舞曲ガヴォット風。無窮動^{むきゅうどう}の楽想と、カデンツァを含む終結部の感傷的な情緒とが対照的だ。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1782年／初演：不明／演奏時間：約25分

楽器編成／オーボエ2、ファゴット、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

シェーンベルク

交響詩〈ペレアスとメリザンド〉 作品5

アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）にとって作曲の師と言えるのは、アレクサンダー・フォン・ツェムリンスキーただひとりだ。シェーンベルクは1895年、銀行で働くかたわら、アマチュアの楽団でチェロを弾くようになった。自分たちで演奏するより他に、音楽を聴くすべがなかったからだ。その楽団を創設し、指導していたのが、ツェムリンスキーである。

シェーンベルクとは当時、互いの作品を見せ合っていたに過ぎない、とツェムリンスキーは話すものの、シェーンベルクのほうは、師の楽譜を見ることで学び、折々に得られる助言によって作曲家としての歩みを進めていった。

シェーンベルクはそうした助言を大いに生かし、1897年に弦楽四重奏曲二長調を書き上げた。ツェムリンスキーはこの作品（とその作曲者）を世に出すべく奮闘し、ウィーン音楽芸術家協会の演奏会で、同作を初演することに成功する。作品は好評を博し、翌年も再演された。しかし、次にウィーンの聴衆がシェーンベルクにこうした拍手喝采を送るのは、15年も先のことである（1913年の〈グレの歌〉初演）。

デビューしたものの仕事に恵まれないシェーンベルクは、ベルリンに新天地を求めた。新妻のマティルデ（ツェムリンスキーの妹）を伴って1901年、同地に移り、劇場の座付き作曲家となる。しかし、その仕事も1年ともたずに契約解除された。

ピンチを救ったのはリヒャルト・シュトラウスだ。シュトラウスは、シェーンベルクの取り掛かっていた作品に感銘を受け、コネクションを利用して若き作曲家を音楽院の教師のポストにねじ込み、奨学金を獲得させた。このとき、シュトラウスの心を動かしたのが〈グレの歌〉の一部、そして交響詩〈ペレアスとメリザンド〉である。

この交響詩はその名の通り、モーリス・メテルランク（メーテルリンク）の戯曲（1892年）を下敷きとしている。シェーンベルクは当初、これを原作にオペラの制作を目論んだようだが、すぐに断念し、交響詩の作曲に向かう。「超時間的な性格」を持つ「人間の永遠の問題」を戯曲の中に見たシェーンベルクは、それらを表現するには声楽曲でなく器楽曲がふさわしいと考えたのであろう。

作品は単一楽章だが4部構成を取る。その4部は交響曲の4つの楽章のような体裁（中間にスケルツォ風、緩徐楽章風の部分を含む）で、さらに全体としてソナタ形式を採用している。登場人物やその関係を示すのに、ライトモチーフ（人物や事態に特定の音型をあて、それらを示唆する書法）を用いる。

第1部 「暗い森」を思わせる陰鬱な響き。大きく跳躍した後なだらかに下る「運命」の動機が続く。やがて下降線を描くモチーフをオーボエなどが奏する。これが「メリザンド」。彼女を見つけた「ゴロー」を表すのは、付点とシンコペーションが特徴のモチーフだ。悲劇を予感させるような楽想の中、上下に大きく跳躍する旋律が登場する。「ペレアス」のモチーフである。ここでペレアスとメリザンドが遭遇し、恋に落ちる。どこまでも昇り行くようなメロディは「メリザンドの愛の目覚め」を示す。

第2部 3拍子にギアチェンジしテンポを速める。それはペレアスとメリザンドの戯れの音楽。やがて速度を落とし「ゴローの嫉妬」のモチーフを低弦楽器が響かせる。ペレアスとメリザンドの逢引きの場面では、「メリザンド」と「愛に目覚めたメリザンド」の両モチーフを重ねつつ繰り返す。「ゴローの嫉妬」を挟んで、「運命」が大きく鳴り響く。

第3部 「愛に目覚めたメリザンド」に続いて、ジグザグに跳躍しながら上昇する「愛の場面」の旋律。それも束の間、ペレアスとメリザンドの関係に気づいたゴローが、弟ペレアスを刺し殺す。

第4部 第1部の「暗い森」を回想したのち「死」の動機を引き出す。この動機が「メリザンドの愛の目覚め」とほぼ同じ音運びであるのは実に示唆的だ。ゴローの怒り、メリザンドの死の床の様子を示してから、「ゴロー」と「運命」の両モチーフで悲劇をしめくくる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1902～03年／初演：1905年1月25日、ウィーン／演奏時間：約41分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（バスクラリネット持替）、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット4、トロンボーン5、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、中太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼）、ハープ4、弦五部

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Program Notes

ワーグナー

楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉から前奏曲と愛の死

歴史上もっとも有名な「許されざる恋の物語」として、「ロミオとジュリエット」と双壁をなすのが「トリスタンとイゾルデ」伝説だろう。その原型は少なくとも12世紀のフランスまで遡り、やがてさまざまに形を変えながらヨーロッパ各地へと伝わった。たとえば、アーサー王伝説には「円卓の騎士」のひとりとしてトリスタンが登場してイゾルデと恋に落ちる。物語のディテールや人物像にはさまざまなバリエーションがあるが、リヒルト・ワーグナー（1813～83）は中世ドイツの詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの著作でこの伝説と出会い、やがて自らの台本によりこの物語を再構築して、楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉に仕立てた。

騎士トリスタンはマルケ王に嫁がせるためにアイルランドの王女イゾルデを船で迎える。イゾルデにとってトリスタンはかつての婚約者を殺した仇。しかし、ふたりは密かに惹かれ合う。毒を飲んで心中を図るも、侍女が渡したのは毒薬ではなく媚薬だったため、ふたりの間に愛の炎が燃え上がる。イゾルデはマルケ王の妻となったものの、トリスタンと逢瀬を重ねる。だが、ついにふたりの裏切りが明るみに出て、トリスタンは王の家臣の剣にかかって深手を負う。マルケ王はふたりを許そうとするが、トリスタンはイゾルデの腕のなかで息絶える。

この愛の物語に先立って演奏される前奏曲と、ラストシーンでイゾルデが絶唱する「愛の死」はしばしばつなげて演奏され、「前奏曲と愛の死」としてオーケストラのレパートリーに定着している。前奏曲は憧憬に満ちた様子で開始され、次第に官能性を帯びながら高潮する。頂点に達した後、弦のピッツィカートで静かな終結を迎えると、続いてイゾルデによる超越的な愛の讃歌ともいえるべき「愛の死」が始まり、忘我と陶酔のなかで幕切れを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1857～59年／初演：1865年6月10日、ミュンヘン（楽劇全曲）／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

ブライス・デスナー

2台のピアノのための協奏曲（日本初演）

近年、従来の常識を打ち破るようなジャンルを超越した音楽家が次々と登場しているが、ブライス・デスナー（1976～）もそのひとりに挙げられるだろう。デスナーはアメリカの著名なインディ・ロックバンド“The National”のリードギタリストとして活躍するかたわら、クロノス・カルテットやデイヴィッド・ラングらとのコラボレーションを通じて、現代音楽の作曲家としても成功を収めている。室内楽作品〈殺人のバラード〉を収録したエイト・ブラックバードによるアルバムは、2016年の第58回グラミー賞で最優秀室内楽パフォーマンス賞を獲得。さらに第60回グラミー賞では“The National”として最優秀オルタナティブ・ミュージック・アルバム部門を受賞しており、その越境性は際立っている。

2台のピアノのための協奏曲はロンドン・フィル、ドレスデン・フィル、スペイン国立管弦楽団などの共同委嘱により作曲され、カティア&マリエル・ラベックのデュオにより2018年に初演された。曲は伝統的な協奏曲と同様、急－緩－急の3楽章で構成される。短いフレーズの反復を基調とするスタイルは大きく見ればポスト・ミニマル・ミュージック風だが、型にはまらない多彩さがある。

第1楽章 きらめくようなピアノのパスセージとともに華やかに幕を開ける。ゆったりとしたピアノとホルンの応答を経て、エネルギッシュに疾走する。

第2楽章 第2ピアノと弦楽器が静かに刻むパルスに、第1ピアノが語りかけるように重なり合う。「夜の音楽」とでも呼ぶべき静謐さのなかから、次第にリズムカナルな楽想が浮かび上がり、やがて頂点に達すると切れ目なく終楽章に突入する。

第3楽章 急速なパスセージの連続がスリリング。中盤に2台ピアノのみによるカデンツァが置かれ、抒情的な曲想に転じる。ふたたび活力を取り戻すと、壮麗なエンディングに向けて突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：2017年／初演：2018年4月13日、ロンドン／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太太鼓、小太鼓、トムトム、プレーキドラム、トライアングル、タン布林、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、シロフォン、マリンバ、エッグシェイカー、銅鑼、クロティル、2枚の木片、金属類）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ2

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Program Notes

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Program Notes

ウェーバー

歌劇〈オイリアンテ〉序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）はドイツのロマン派オペラの様式を確立した作曲家。1817年にドレスデンのザクセン宮廷楽長に就任すると、当時支配的であったイタリア人の歌手や作曲家たちによるイタリア・オペラに対抗し、ドイツ・オペラの地位向上に尽力した。そして、代表作となる歌劇〈魔弾の射手〉でセンセーショナルな成功を収めて、一躍ドイツ・オペラの旗手となった。

そんなウェーバーのもとに、1821年、ウィーンのケルトナートーア劇場から新作オペラの依頼が届く。ウェーバーはドレスデン在住の詩人ヘルミーナ・フォン・シェジエを訪ね、詩人の提案により中世フランスのロマンスにもとづく「オイリアンテ」を題材に選んだ。妻オイリアンテと離れて戦場に出たネヴェル伯アドラールが陰謀により妻の貞節を疑い、ひとたびは妻を殺そうとするも最後に誤解が解けるまでが描かれる。作曲中のウェーバーはシェジエによる台本の拙さ^{つたな}を気にしたもの、台本作家を変更するまでの決断はせず、一部の書き直しで済ませた。初演はひとまずの成功を得たが、台本の不評もあり次第に客足が遠のき、上演は短期間で打ち切られてしまう。現在でもオペラ本編の上演はまれで、もっぱらこの序曲のみの人気が高い。ちなみにシェジエはその後、シューベルトの音楽で知られる戯曲「ロザムンデ」を書いたもののやはり不首尾に終わり、二度にわたる不名誉な失敗で音楽史に名を残した。

序曲は晴れやかな第1主題により勢いよく開始される。ティンパニの導入を経て、ヴァイオリンのしなやかな第2主題が登場する。弦楽器による精妙で幻想的なラルゴから、フーガ風の展開を経た後、両主題が再現して、高揚感あふれる終結部を迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1823年／初演：1823年10月25日、ウィーン（歌劇全曲）／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ヒンデミット

ウェーバーの主題による交響的変容

パウル・ヒンデミット（1895～1963）は20世紀前半のドイツを代表する作曲家。ロマン的な感情表現を脱却した、即物主義的と呼ばれる作風で名声を確立した。しかしナチスが政権を握ると、ユダヤ人たちとの盛んな交流や反ナチス的な態度が批判の対象となる。やがてナチスから作品の演奏が禁じられ、ヒンデミットはドイツを離れ、1940年にアメリカへ亡命した。43年に書かれた〈ウェーバーの主題による交響的変容〉は、アメリカ時代のヒンデミットの代表作である。

作品は当初、バレエ音楽として構想された。ヒンデミットは振付師でダンサーのレオニード・マシーンからウェーバーの音楽を編曲したバレエ音楽を書くように依頼された。しかしヒンデミットが「いくぶん色づけられて少し尖がった」編曲を聴かせたところ、原曲に忠実な編曲を期待していたマシーンは失望し、バレエの計画は立ち消えになってしまう。その後、ニューヨーク・フィルの音楽監督アルトゥール・ロジンスキより新作を依頼されたヒンデミットは、マシーンのために書いた音楽を下敷きに〈ウェーバーの主題による交響的変容〉を完成した。

第1楽章 アレグロ ウェーバーによる4手ピアノのための〈8つの小品〉作品60の第4曲が主題に用いられる。ジプシー風の前奏がモダンな装いをまとう。

第2楽章 トゥーランドット、スケルツォ モデラート～生き生きと 〈トゥーランドット〉といえばブッチーニのオペラが有名だが、こちらはウェーバーの劇音楽〈トゥーランドット〉序曲が原曲。東洋風の主題が賑やかにくりかえされる。

第3楽章 アンダンティーノ 原曲は4手ピアノのための〈6つの小品〉作品10aの第2曲。後半はフルートのソロが活躍。

第4楽章 行進曲 原曲は第1楽章と同じく〈8つの小品〉作品60から、第7曲が選ばれている。張りつめた緊張感とパロディー風のユーモアが渾然一体となっている。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1940～43年／初演：1944年1月20日、ニューヨーク／演奏時間：約21分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、中太鼓、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ウッドブロック、鐘、ゴング）、弦五部

6/20
大阪定期

6/22
土曜マチネー

6/23
日曜マチネー

Program Notes

6/28
名曲6/30
横浜マチネー

Program Notes

ハイドン

交響曲 第22番 変ホ長調〈哲学者〉

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809) は、1761年、ハンガリーの大貴族エステルハージ侯爵家の副楽長に就任した。66年に楽長に昇格してからは、当主で、熱心な音楽愛好家だったニコラウス侯 (1714～90) の命を受け、宮廷生活を彩る様々な音楽の作曲と演奏だけでなく、宮廷楽団の楽員の管理や監督に至るまで、多くの職務を長年にわたって忠実にこなしした。

交響曲第22番は、残された自筆譜から副楽長時代の1764年に作曲されたと考えられている。当時のハイドンの交響曲は、3楽章構成と4楽章構成の間に揺れ動いていたが、64年頃からメヌエツト楽章を含む4楽章に落ち着いていく。第22番は、バロック時代の教会ソナタの楽章配列 (緩急緩急) に由来する4楽章構成である。管楽器は2本のホルンと、通常のオーボエの代わりに2本のイングリッシュ・ホルンが用いられた。独特の音色をもつこの楽器をハイドンはすでに〈ディヴェルティメント〉(1761/62頃) のなかで使っており、後年、宗教音楽やオペラで使用するようになるが、交響曲ではこの第22番だけに加えられた。4つの楽章はすべて同じ調性で書かれ、〈哲学者〉の愛称は、ハイドン自身によるものではなく、のちに第1楽章の落ち着いた雰囲気からつけられた。

第1楽章 アダージョ 弦楽器がきざむ伴奏にのせて、イングリッシュ・ホルンとホルンがゆるやかに主題を掛け合う。

第2楽章 プレスト 弦楽器が軽快な主題を生き生きと歌い上げる。爽やかな疾走感が心地よい。

第3楽章 メヌエツト 強弱の対比を明確にした平明な舞曲。中間部 (トリオ) は、イングリッシュ・ホルンとホルンを重ねた響きがのびやかに歌われ、大らかな表情をみせる。

第4楽章 フィナーレ、プレスト 終楽章も強弱の対比が鮮やかで、管楽器が活躍し、きっぱりと結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1764年／初演：不明／演奏時間：約16分
楽器編成／イングリッシュ・ホルン2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

ヴィヴァルディ

〈四季〉から“春” (ギター独奏版)

イタリア・バロック最大の作曲家アントニオ・ヴィヴァルディ (1678～1741) の〈四季〉は、1725年頃に出版された協奏曲集〈和声と創意への試み〉全12曲のなかの最初の4曲である。いずれも3楽章から成り、ヴァイオリン独奏が生き生きと活躍する。各楽章にはそれぞれの季節の自然と人間の営みを描いたソネット (14行詩) が添えられ、内容に沿った情景やエピソードが音楽で表現される。本日は、ギター独奏による編曲版 (イタリアのリュート奏者ディエゴ・カンタルピの編曲) による演奏である。

第1楽章 アレグロ 春の到来。小鳥がさえずり、春雷が轟く。**第2楽章** ラルゴ 春の牧場。まどろむ羊飼い。**第3楽章** アレグロ 村人や娘たちが踊る。

武満 徹

〈虹へ向かって、パルマ〉

20世紀後半の日本を代表する国際的作曲家、武満徹 (1930～96) の〈虹へ向かって、パルマ〉は、1984年にバーミンガム市交響楽団の委嘱で作曲、サイモン・ラトル指揮の同楽団によって初演された。オーボエ・ダモーレとギターを独奏とする協奏曲で、スペインの画家ホアン・ミロ (1893～1983) へのオマージュとして書かれた。ミロとは1970年の大阪万博で知り合い、その「気取りのない、無垢な」人柄に魅かれたという。タイトルは画家の同名の作品 (1941) に由来し、楽曲の後半ではカタロニア民謡〈紡ぎ女〉が引用される。音楽はゆるやかに始まり、哀調を帯びたオーボエ・ダモーレとデリケートなギターの音色が、豊かなオーケストラの響きのなかで浮かび上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

【〈四季〉から“春”】作曲：不明、1725年頃楽譜出版／初演：不明／演奏時間：約11分 楽器編成／チェンバロ、弦五部、独奏ギター

【〈虹へ向かって、パルマ〉】作曲：1984年／初演：1984年10月2日、バーミンガム／演奏時間：約15分 楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替、アルトフルート持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3 (エスクラリネット持替、バスクラリネット持替)、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、打楽器 (トライアングル、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、ゴング、銅鑼、鐘)、ハープ2、チェレスタ、弦五部、独奏オーボエ・ダモーレ、独奏ギター

6/28
名曲6/30
横浜マチネー

Program Notes

6/28
名曲6/30
横浜マチネー

Program Notes

ストラヴィンスキー
バレエ音楽〈春の祭典〉

1913年5月29日、ロシア・バレエ団による〈春の祭典〉がパリのシャンゼリゼ劇場で初演された。「天才を発見する天才」と呼ばれたバレエ団を主宰するディアギレフ、音楽担当のイゴール・ストラヴィンスキー（1882～1971）、振付のニジンスキー、台本、背景画、衣装のレーリッヒ、4人の芸術家たちによる新しいバレエが誕生した。しかし、序奏が始まって1分もたたないうちに、野次と怒号が飛び交った。変則的な鋭いリズム、耳をつんざくような不協和音、圧倒的なオーケストラの響きに加え、舞台では顔に幾何学模様をつけたダンサーたちが内股で飛び跳ねるなど、これが芸術なのかと観客は困惑を隠せず、そのまま席を後にする人もいた。それは、非難と称賛が交錯する、音楽史上最大の事件だった。

ストラヴィンスキーは、モスクワのマリインスキー劇場の名バス歌手の息子として生まれた。サンクトペテルブルク大学で法律を学ぶが、在学中に作曲家になる意志を固め、リムスキー＝コルサコフに師事して作曲の勉強を続けた。1909年に発表したいいくつかの曲がディアギレフの目にとまり、彼からパリ・オペラ座で上演する新作バレエのための音楽を依頼された。祖国ロシアを離れ、パリの楽壇にデビューしたストラヴィンスキー。バレエ音楽〈火の鳥〉(1910)は、喝采を博し、第2作〈ペトルーシュカ〉(1911)も成功を収め、第3作〈春の祭典〉(1910～13)は、未曾有の大騒動となった。作曲者によると、〈春の祭典〉は、〈火の鳥〉の最後の数ページを作曲中に着想を得たという。「いけにえに決められたひとりの娘が死に至るまで踊る異教の儀式的場面を夢想した」(ストラヴィンスキー)。だが、すぐには着手せず、〈ペトルーシュカ〉を完成させたのち、1911年夏から取り組み始めた。ストラヴィンスキーは翌年の上演を希望したが、ニジンスキーの健康状態の悪化もあり、初演は1913年まで待たなければならなかった。

全体は、2部構成で、第1部は生の世界を描き、第2部は死の世界を象徴する。すなわち、第1部は、大地の再生を祝い、人々は喜びに満ち、恍惚として大地を踏み鳴らし、第2部は、ひとりの少女が選ばれ、いけにえに捧げられる。音楽は、第1部、第2部合わせて14曲から成り、続けて演奏される。

第1部「大地礼賛」

序奏 高音域のファゴットの神秘的な旋律で始まる。管楽器が主体となって狂乱の前の静寂とざわめきが描かれる。**春のきざしと乙女たちの踊り** 弦楽器による鋭い不協和音、独特のリズムのきざみが強烈な印象をもたらす。**誘拐** 太鼓を合図に金管楽器が咆哮し、打楽器が乱舞する。変拍子のリズムで次第に熱を帯びてくる。**春のロンド** フルートとクラリネットによる民謡風の旋律が示され、中間部は重たく引きずられる。**敵の都の人々の戯れ** 2台のティンパニが暴れ回る。賢人の行列 ホルンの響きに導かれ、各パートが異なるリズムを同時に演奏したあと、長い休止となる。**大地への口づけ** わずか4小節の静かな音楽。**大地の踊り** 大太鼓やシンバルの響きが大地の目覚めを表す。管楽器の濃厚な音色で大地を讃える。

第2部「いけにえ」

序奏 夜の情景。木管楽器が妖しくうごめく。**乙女たちの神秘的な集い** ヴィオラの六重奏が不安げな旋律を奏でる。いけにえに選ばれることへの乙女たちの恐れを表している。その旋律は様々な楽器に現れ、ホルンの合奏を合図にいけにえとなる乙女が選ばれ、強音が11回連打される。**いけにえの賛美** 5拍子、9拍子、7拍子と目まぐるしく拍子が変わる激烈な音楽。**先祖の呼び出し** 低音楽器の響きに導かれ、管楽器がきっぱりと旋律を示す。**先祖の儀式** 大太鼓とタンブリンの神秘的なきざみなど、シャーマニズム(肉体から魂が離れ、天上や冥界と交信するという思想)の影響がうかがえる。**いけにえの踊り** 不協和音と不規則なリズムが繰り返され、最後の強烈な一打で乙女の生命は尽きる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1910～13年／初演：1913年5月29日、パリ／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持替)、コントラファゴット、ホルン8(ワーグナーチューバ持替)、ピッコロトランペット、トランペット4、バストランペット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、クロティル、タンブリン、ギロ、銅鑼)、弦五部

6/28
名曲6/30
横浜マチネー

Program Notes